恋の人娘

へ13
3165
4

門へ13
3165
巻4

昭和九年
九月二八日
購求

初學入門第二編叙

拾遺を記録し善を観て善を知るべし
善報あり悪を改めず必悪報あり
善報あり悪を改めず必悪報あり
所以度の先達もこれを教への目的とす
若し事に初めて悪を懲て然る後
ども善悪の報応相応して邂逅する唯
地獄の観ることを鮮かけまバ幼童雅女を

世の報いおそれがぬくふ思ふもかりて甚しく
ふるうて茶の道もて廣さえ学ぶそのの
報いふ遅速あるて遅れい人の生涯を見
端さてこのあまたびなり。高雅卓とうなき
草紙を編みて行るまま人千有余の
なを意像い冊五編まて若き勉の報
いを明し多く小善小悪なるも史

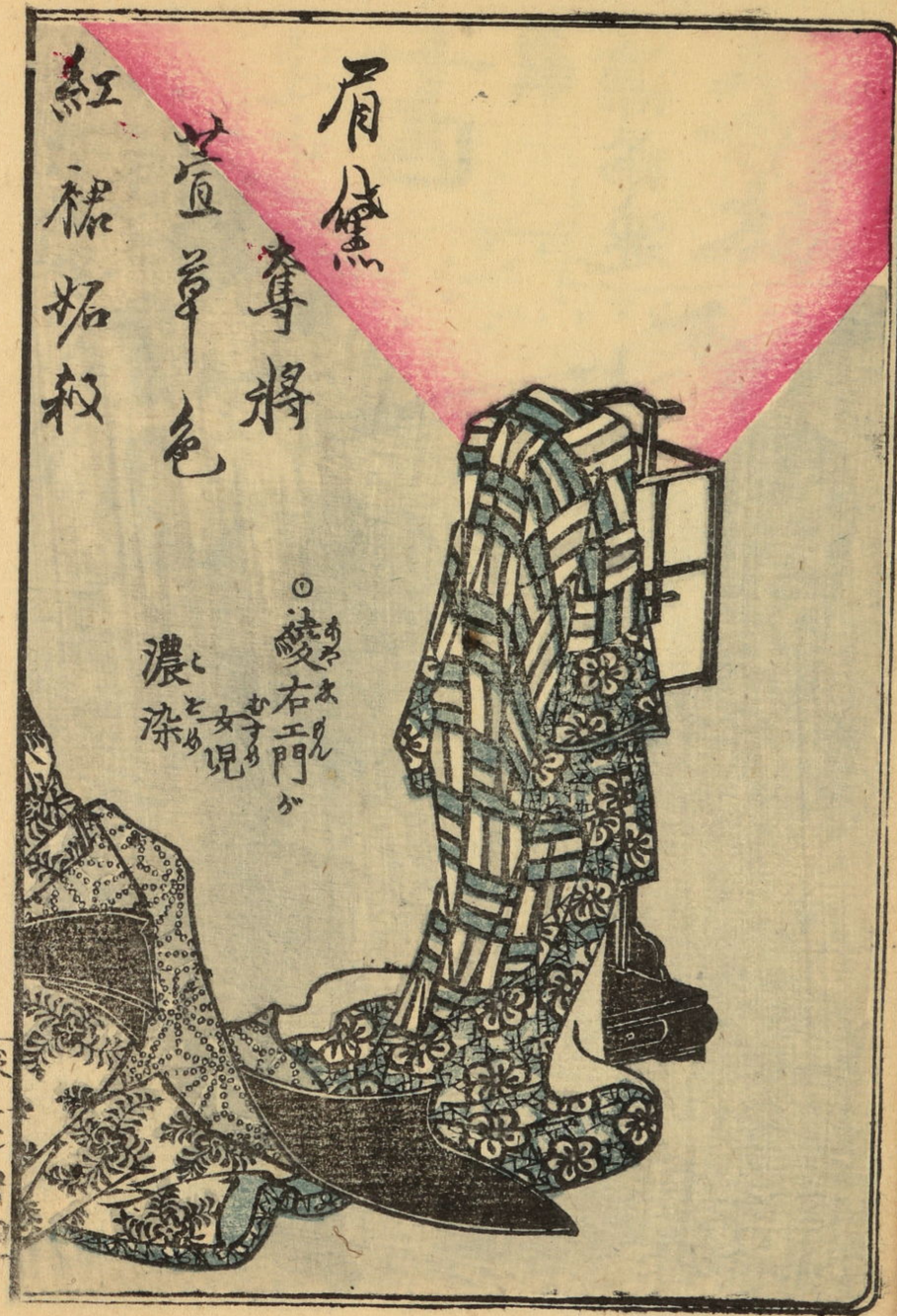
小報いあるその所要約摘ふ
虚説戯言なし。勧善懲悪の捷徑
あるべきの古より出ずなるべ

独著堂主人 誌

今様
踊の
大
沒
の

古今集
五節のまひ
良峰宗貞

連中
千匹
浦祭連
拾駄
赤治の渾家
於夏
彩八
於渾家
於絹


肩衾
奪將
萱草色
紅裙炬敕
○綾右エ門が
女児
濃染

石播花
○絹屋彦太郎

毬唄三人娘第二編巻之上

東都　松亭金水編次

第三回

七色富貴奚伐。天の為る所とは。まこと能くの因ふる欲。ゝ小幸八お紡ぐゝき。新世いつある悪報ゝ。今ハ困窮零落し。朝小炊く米さへ。夕小索もる術ナ。ゝく。実小凍餓の苦しゝあるまゝ。お紡ぐ貞操他小。ゝて。その赤心を現ゝ。画夜間臨障ゝ。

他人の衣裳を縫ひとりて。僅の代を貪ひ。ことを若
と曰汁の実とも。あらいまつる家の住ひ。祭ふ良人
の長物ひ足接さ曰月曰ふ。それぞれの業病を。
その元を問ふ看病して。朝夕ふの艱難辛苦。神も
憐こもひて。汁る業ハ千人ふ。勝ぬ嘆を止ふ咬元
くふりひゞみるくも。赤治ようして持返む衣裳。彼ハ名
ふ知ハふ限ふて。十業ふ曰ふれ女児の為ふ。頭ひと衣
裳の華美ようさ。金ふ飽せ一のるとば。仕立の賃ハ仍
りごで曰。ものこふ任ひとハふ。お清ハいとで光来るくハ。
ふひふぐらう曰肩ひて。その泊文の手付のまふく仕立て遣
けとば。赤治の渾家のお夏とハるゞうち抜きてゐ
毎ふ。感ふせゞとハとをあく。かぞうの人達ふれ。訴ふを
を知らぞして。手処ふ此処と仕立物所ふ。乳を揉し
こて来ふけとふ。以来ハ常のものまゞ曰。七のお清ふ教まん
と。ふひ芸ふたの人ふ曰。一回ふ直てあきこて。かの泥町ふ
仕ひをして。仕立物の賃の外ふ。百匹の奇代きて同芸の

欽びい。大うさうぐに於てハ。以来ハ茅の仕立ての。殘らぐに
お形こゝ中しこさ。吏ホ拵てハお同ホかゝと。お知已ホあつて
ある。於バ。便利のうるきゆきあまぐ。今日ホ明日ホ由
浦おまで。茅て下さまと。叮寧ホ。以紙まハ今の文化。
まぐ。僥倖の一ッあり。とおりへバ雑ようく挨拶しいと。細こと
雑を述て。その便ひを帥しやと。さて浦おへまくにつけ。
国窮者こゝうのの。君こゝうるてよう。ちまてハ居まど大家の母。茅
公人のまおさ。些整頓ぐハあるまいと。吏澤。俱く雑

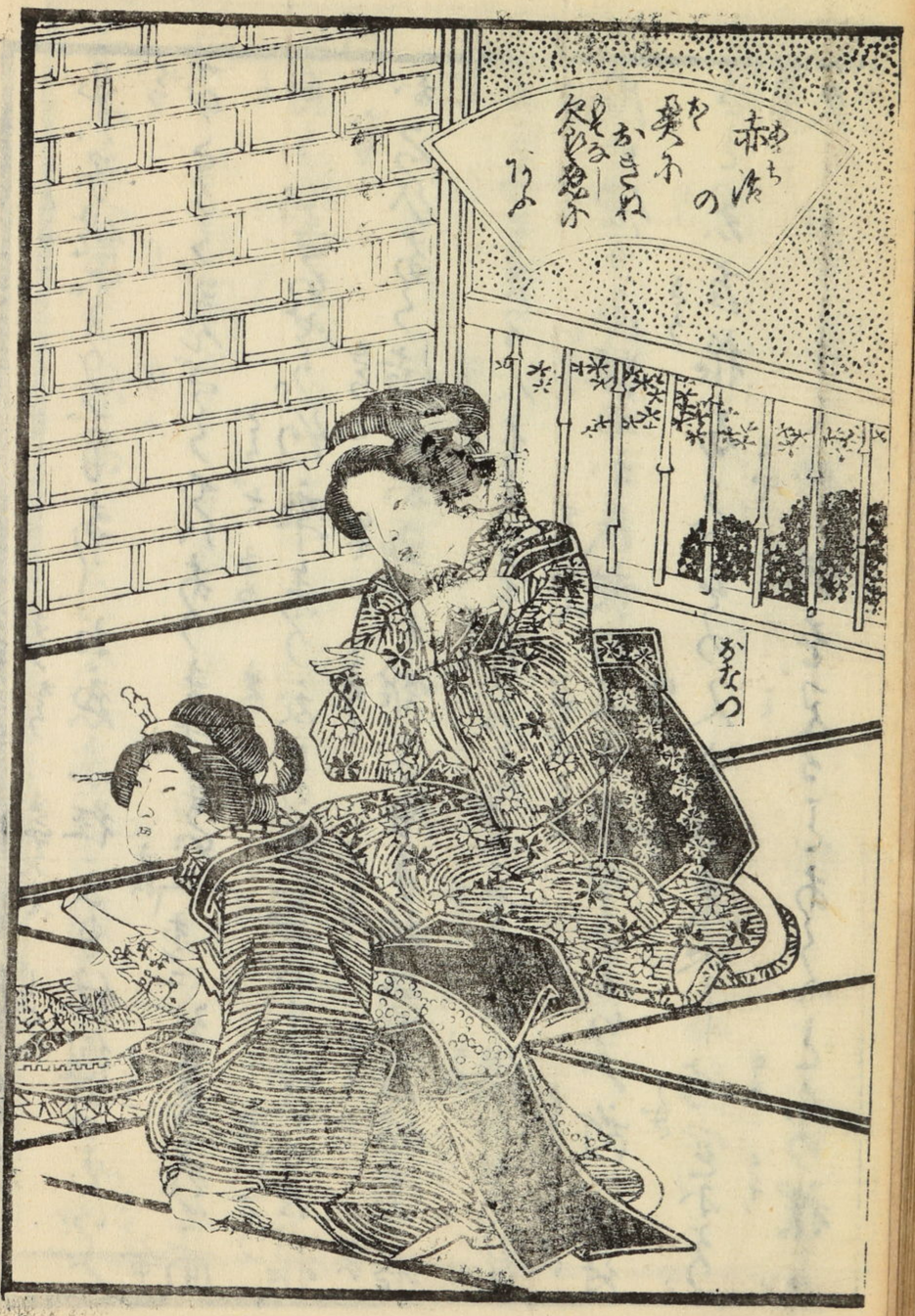
合。吏ホ茅ゆもしよう。調法あるこの。泥町。加の香
代半おきものと。おりへば。形ハ挨拶衣裳久しぶりで
の変化。紙。ゆまとうつ。ゆ仏地して。菓子一杯をホ
喜こと。赤沼へゆきて書伝バ。サアく些方へと。書ホよう。
奥へ通して渾家のお表出来うて挨拶。此度ハ
さそ閑ぐしらうホ。茅ぐ形をお形こゆて。お気の毒
でありましぐ。どまあく。注文色う。誂ホよく出来ま
こ。今まで出入の仕立五郎二三形あり。踊衣裳ハ師

西の方へ新んで仕立てるものあつらへ。何時でもいつ
ふりでも。その新変ふ気をもりむのサ。所ゞ今田ハいつ
で。深ふ様しうぞいますハ。何卒こゝ平生の芸能。
不残お形とやしうへ。どうぞ古根出来ずうゝ子「ハイ〳〵此
頃ハお仕立代まゝお身まで頂きまして。深ふ為ぞこゝ
ぞいます。今日ハそのお様ぞこゝ。よつとまつて。まゝ稚こ原
いお河。私も落命で。紀伊ふ様いゝ。拙ハ新ふ新線で
やう〳〵とその日を送るもこゝふさのお義。何ありと出来

まゝ。ものあつら。法が骨ハ形まんこう。お仕ひ拵ぞして下
さいまつトいと楚然なる河の端〳〵ふ。ハ新意ふ。
善しこ人の果ゝんとおもへバ不仕ものふ場。世間影
ふ様るもう。縁てひつけ来しふ。酒と穀ハ二種ぞう。
爽蓋ふ戒て拾出ん「今日ハ生憎何ふ為ハいゞ。
何卒一口あつておくれ「とハモウ存ぐけ高い高已
私ハ深ふ不調法一つも頂くあハできません「文
でもお芳世こう空らう。ドレお猪をつゞてあげ可

一杯のことゝ為さ在ふ。然のことゝふ辞しゐて。半分ぢう
潮〻飲ゞ。「却てお迷惑ぢらう。丈ぢうか茶漬を
あげやまと。侍女どもふいひつけて。「主処で子フイウお
絹さんとやうのよゝお渡ゆ明後日と極つて。赤邑屋
である筈り。今回ハ師匠ゆ一世一代で子。例ようハ大仕
掛せ。殊ふよりようハ俳優ゆ見物ふ来るとゝふ事。
何とおお開ぐくゆあらうが。日中時分ぐらゐ見ふ出
ふ。お戸へ来て赤治ごとゝふと。亜案内をして呉る。中

ゆ子供ぢうでゆあゝ。「お爺ふ狂云ゆ仕組ごとゝの
ものゝ。ぢうまんざらでハありますまの。「ホンニ」そもゝさで面
白うぐらいせう。何卒来ふ交ゆのでぐらいます。「芝居
お見ひあふ佳交お出ヨ。お雛子ゆを拵ひで。数時まづ名
人とゝふ人ぢうを存ふとサト吹てお絹ハ内の理
風の便りふ妹のお民。敲の上ゆ誰やうとゝふ新へ縁対
ふ。若旦那ぢうばその人ゆ。必来べし。時宜ふ。
久しぶりとゝふて。姉妹を。ゐることあゝんとゝふの程ふ。


かなつ

花立ちをかしかりしども。今日さへ衣紋の扱ひ料あて。
ふ〳〵雇ひ〳〵奇の代も。画勝かりふる迷惑さか。
又明後日も借衣裳と。そをさへ拘かる癖ぐりいで
ハせんと扶拶も。口隠る粋を案るお夏。を簡単笄
ふり何おろう。把出して紙かを接ぎ「ちちか漆かをか
いけどど。金体今日ハうぐ〳〵と。お味ふてまろして
ロ沈黙でも。おろうとの新お酒ハ飲かさうぞ。仕拍
グあいうふの代りぐョ。何卒帰りかを篠かでも。素て

結そおくをトいひ〳〵お絹がおかをけば「ハイ是ハモウ
ふ〳〵あぐろ。比君も頂きません〳〵。まと今日も頂いて
ナンおお世おろう。マアく取て来ておくをその代り物
後日ハ。何卒操合して来ておくをを拍ハと自
慢らいが。おあの仕方と衣裳を見せて。踊るのも
又せふいろサトいそまして又をば延引あるば「是迄
明後日ハあぐりませろう。体今日ハ香後あぐって。稽〳〵
ありがろうどさいまん〳〵ト一稽述て帰りの。幸ハかも

妻く喝し。世の流ふを持る神。あるべ助ける神あり
ふ。是皆のと走りふあるん。年ハ三十ばかりふ又中ま
ど。何ぞ何まで雑ぞうか。如在内儀のなを巳。不
易しとるを初まで。最愛ふさるるもの辛苦を。
忘れ雑し歌べば。幸八中倶くろとび史とふ中目来ろ。
貞実孫義を神や佛のあるをこのふりのあるんと史
婦いらそく歌ぶかり。かくてその翌く日ハ赤村座のさ
ひの日孫ふ天気ゆうらるあて。く辞ある日和あ。来

お僥倖と喝きあぐろ。そをかと対る流し元。仕舞て私て
髪化粧。良人が二度の食ゆの菜。火鉢中傍へひきよて。
出稼へさをべき者さ中。多のかられ世ろ准備る一
史ある雑て来ります。全体を之ろの様ろぐけを
ど。早く雑て用ゲある者ろ。傳てあげるが宜と。社作
ろ左招ゆ世ろ。ゆを所の人ゲアノ内義さんハ。此
ひいろく出て歩ゆと。大かく喝を中ゆ世ろね。行ぐろ
遠此招ふ来物を来ると。私ろい来ふおりひます。

「まづ〳〵まづ〳〵。久しぶりでお方の美しい新を見る。例の髪は。結作じゃ活き布子羽織とゝばせんが歩そ。和尚倒まで芋蒟の四方赤を。縛させてあく自己。がん。朝小晩小拍ぢう。寝ぐらて絵方あり。史で先ゞ死ぐ方が。いつをあの俤俳ぢと。竟最癖をひ出て。叱らまでるがあつて。実小左招おりんぜ。何年せあてこの位小。忘拍の二枚や二枚は。持してあく四ふ仕度トいつも誠のが解つと。おりまでんぐ口へ出るぞ。寝ゝて

拍まで弱まども。及ぢれ苦労をさせじとおりひ。ふふあゝれ笑ひ新「まあ。お招も。全体主招ぢやアあるまいが。久しく旅らって。お在の所為う。大造最廊小あんるまいと子。私しゃアまて古招ぢやアありません。人は七拍八記と。やうで。悪いとぢうもまあいが。まうとうあいのが浮世。史ぐうう出流まで。此日まぐは土庫造りで。廊の人も大勢あり。廊人も盤昌して。ぐん赤るがあるうて。大丈夫と。又ある宅。ヲヤ何招ぢ。世庫の妻吾の礼が出て

と。胆を潰さるゝ義許もあるまんぞ。その人達を寄して出
逸あるべゝマア何程でありませう。更ゝ又マア吾俳どもハ始
めゝ一文ゝ。活く新ゞ二両ゝ。二両のものを拾居さだゝ。
さるまゝ今日まで一月ホ二回程ゝとゝもあり。まさう寄中ホ茶
の湯。拾を忘て居ゝるもあり。絶でも張てもとゝくの。茶
物を引ゝみて居ますの。不測ごとおりハるゞかゝい又
出来る時苦ゞ来まゞ。綾瀬でも茶ませうハ子。何の事
拾ホ式世でも。苦ホまるゝハごゝい申せんヨヤ〳〵嘯て

居るうちホ夏賀屋ゞ来ゝ。ドレまゝ徒ませう

第二回

ちゝホ二国橋の川向ゝ。赤邑屋の楼とハいゝで廣ゝ有る
ホゝ。吉曲踊りの大さゝひハ。大ゝゝゝ少て催すゝり。今
日ハ中村歌吉ゞ。子おゝびその連中。ずゝりての浸
ひゝゝ。朝まゞ紀ゝり集舎人ハゝの楼ホ充満しる。世
話人ハ舞座を補理。或ハ雑子方太夫の山盛を
外と客の技義ハ。青竹をりて手拍とす。毛毬まゝ

櫛通を敷て。その花やかなる女児を連て。今日を晴と装ひ藤り。衣裳葛籠ふ
衣装の。小長指を舞ふ世入と者まば世話人初め。
師匠の手処へ弦出。こゝろとゞくの扶授も。追従姫
落情痛し。かくて赤治はを長くふ。祝儀の包物など
取らせ。かの青竹あて仕切らると座の方ふ入とけまば。
今日産ゝ見て来るお雛子も。そゝとつるうとく来
て。見物おさやうお内義さん出撫様ようさく置き。

とゞ者ふ小ものこゝふ祝義をとうさて。実ふ春ありて茶
藍の。花をゝうさる櫛ふ赤世界和世りうる者若まて。
かゝる富者を東洋ぞと。義こゝ忍れりのも有。祝ふく
准後も出来しうて。頓て舞意ふこち並ぶ天文三法
雛子ゝく。撫指も持ふ華英衣裳。とのゝあうの二
女児ハ准やんゞ祇を撫して。ゝて縁やふ舞かまで。
さゝ女児ふ小ゝこゞふて。長唄あり洋猫あて。入
かゝ引かゝ踊るめり。お絹い箱ふとく者て。赤治丈婦

不換授ち。侍女婢女彼のもの。居べき間ゝ案内
ゝ是。実処ありて見物せ。さても四色を見まゝせば。
今日の書組筆太ゝ紀して彼処ゝ法てあり。そもゝ
雑子ゝ連中も。書く載ゝ是ば。実くあゞゝも結くゝるゝ。
小敷幸雅氏とゝ。四五変もゝえわもど。しで敷ち
ゝ縁づまゝと。咲ゝるのゝ少て名ゝまゝぞ。ゝもども
氏ゝ妹の名義もゝもゝ無もあゝば。十年ゞゝ
ゝ中絶て。互ゝ意もゝ見もせるもど。ちるべきやうゝ

ちゝ夫ゝの次ゝ主人の。出る変ぞと丈のゝを。深くおりゝば
艶葉ちゝ。唄の琴ゝ。耳ゝゝ入ゝゝぞ。潔く果てゝ次
ゝ淺妻紅とゝ長唄通ゝ。的歴ゝ並びて。赤治
の女児も出て踊る。お絹ゝ雑子ゝめとつけて。敷ちと
ゝゝ見もど。ゝゝ出ゝゝ人ゝて。いづもゝ衣裳ゝ
花ゝゝ。十七八の猿ちるゞ。眉を落して年の齢。二十
三四ともゝ見るゝ。考もゞお氏ゞ年ぞえ。今世ゝ
ゝゝゝもど。家業ゞゝゝて茶くもゝ見べし。それゝゝゝと

探頭探脳。よくよくとおりくどもおりくどもの後の方に在て。その容貌い定うあるうねど。ろくもの畧差ひて。お底のろ
ふ名ゝを紙ぐ。ろふ。ろくは夫ぞくど。まぐこの他ふも敷
あのと。さまども今日い来れ来れふ。人の種ふ名ひ昔人。長
ありてその踊りの果ふと等一赤治の渾家。お夏ハとく
来りて「お絹さん出流ぐらう子。お夏の仕立てお呉の衣
裳ぐ。宅治梅ふ出来ゝうふ。踊りよりさうふ口ゝえ
ヨ「あどうろうハ石ゝ訴ぐ。大造ふよくゝ引立まゝゝ子。大
うゝ来ゝ嬢のおがりめつまでどぐいませうが。傑ふお足立ぐ。
おとまて入り来る。そてまアお娘さんの出装用ふと。ホンニ
感心いゝまゝゝ。相方のお児ハ二ッ斗ゝ。四年ゝふ足
えまをけまど。何招ゝ丈ゝふ。脚ぐお身ぐ動
きまゝ。そてまア風鑑でさト契ゝまて新ぐ母親「
ナアニまぐ出来ふいけまど。毎日ゝ吉俳ぐ傷へ引つけて
来ゝうゝ。ゝゝ差ひまゝゝうねエ「そうゝアア差ひまゝてのぐん
ぢやアどぐいません。鈍ふあくッて何招ゝて彼招ふお出来

あさいまんりのう。実ハ老ゝ嬢のお骨まうゞ「イヤ
「ヲヤ」ヤ煙草の火ハ消てサ。と豆火を拾て煙てあげや。然
ゝて下の伴所ハ左拍云て。先刻所けゝ主婦のおすゞを
誠せと云て。とゝて煙てくれやト禅女ハらひつけ者ゝ。拍
拍ゝと嘲きうち。主婦を拍て煙とバ「主処ハある菓
子屋を出ハ。アサ子方のヨト把よして鯖をまゝこと」
とゝハ先刻拍ゝ要ゝ。一ッ拍て四枚。ハゞゝ脇
まり宜さきうゞ申まいれエ「ハイ」ありゝゝ。ハイ。お初様

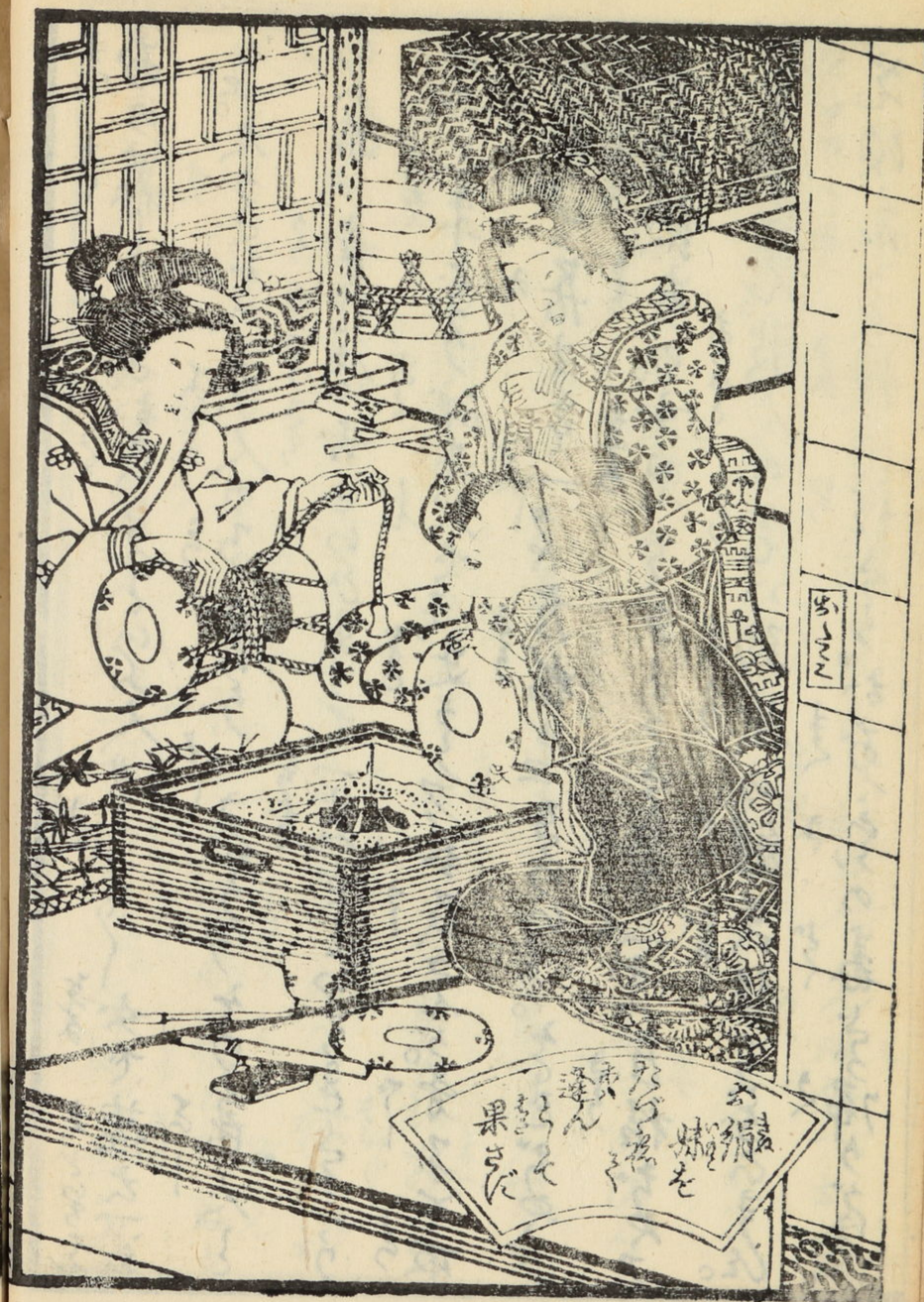
をいゞきまして。「ナニサ」あちゝハ申稚ゝあるゝ。とゝハ
女どもハ拍させるヨト。何時ハ智ゝ私ハ在ます。嘲ー序
ハ敵方を。呼て見あんと先刻ゝ。度ゝ胸ハ浮ゝ
うゞ。何拍ゝ敵と根石をさゝ。困ることあんゝ。
バ胃て鋼ハ出さゞん。拍あゝ次の幕開きして。お夏申彼
方へ申けゝバ。今田の敵の名あハ。ゝの人者ゝ申ハ
けゝゞ。差ゝ人申出ゝゝ。とゝゞ各為田髪。十四
五ゝの娘のゝ。偖申何拍ゝゝのあゝんと。ゝハ縺

高さあります。十五六の角髪姿。その風ひの内ニ入て。莞
爾と笑ひます。「面白ういどざいますうと云てお
絹ハ云釈ます」「孫ニ宜どざいます子トいふ形を処ニ
居る婢女「あんどナ長吉どん行ニ来て。大きな形
で云処ニ居ちやア。吉俳ニ一向ゑえあいヨウ。おおざ
っぱアあをこふ。お桟敷ガあるぢやアあいう「そうやアサ
居所ニあるけまど。まいうちちつくり来てんぢアエ
ア小敷ハ。先ニ宅へ来て。佐所町のお役児ニ。

彼所居のお初ハ見ニ。モウ一人ハそを池の端の一丈ニ
子のお番とりンど。ハの相しても池の端ハ。丈時ニ
で一丈の所迄ざうう。注排ガ遠うニアア「モウその口釈ハ
宜うう。サアア彼地へ往ニ世エ「ヤ人を形蹴ニ
ちうニア。丈ちうお所のお尻を。芸ざうう切結ること
へ出て居うまるものヨウ「ヤ人を居庫ニ云る
ノウ。お内義さんニ云ヨ「イヤまアそをやア話ハ
ちゃ嘩うう。丈ちうど色ニ往ませうト立ニかまど

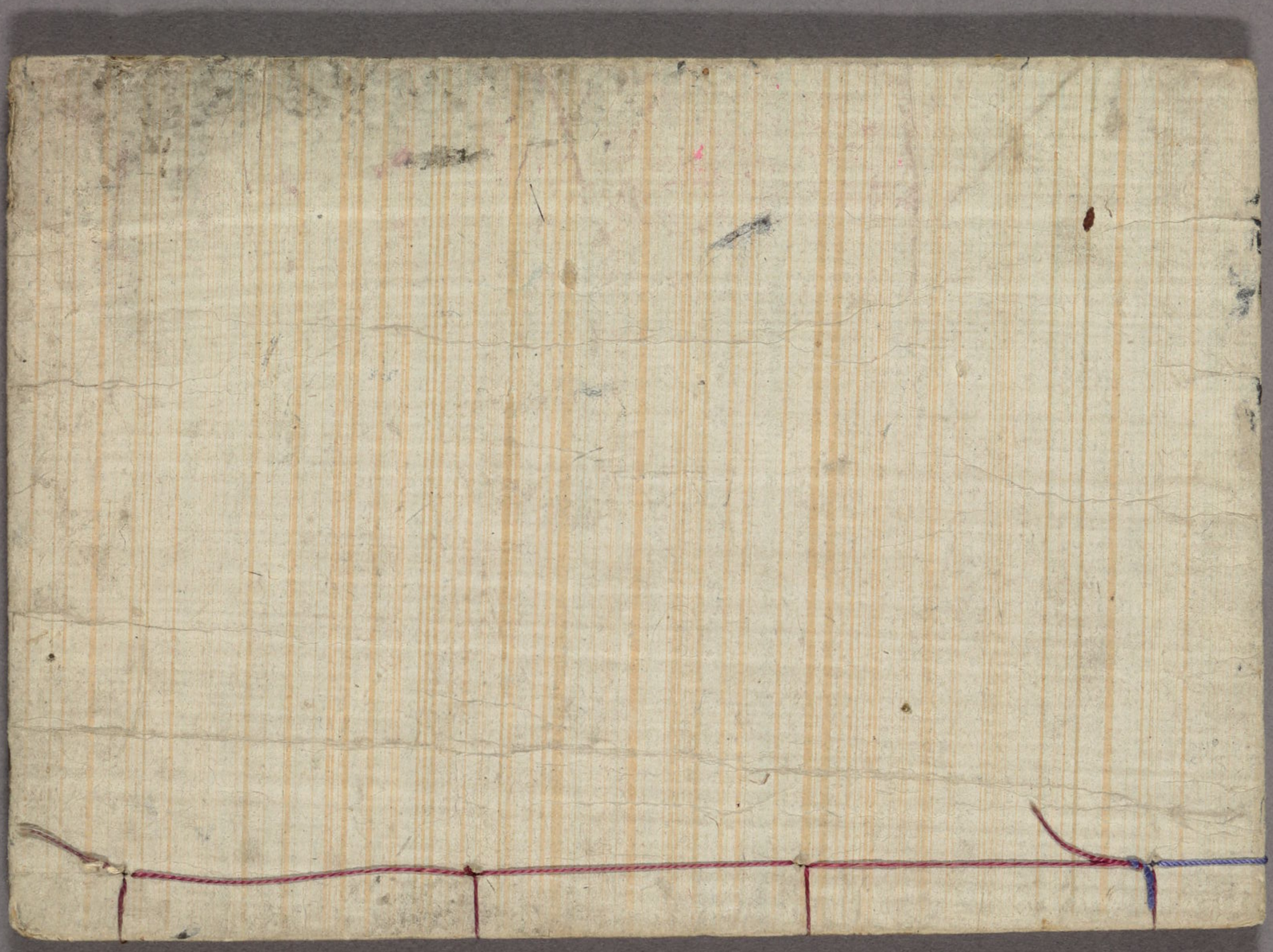
「はまべの面白い丁稚さんぢ子おさんどん此処へお出。
吾俳い形ぢ小さいこと。何処へ這入てもあること。
打蘭この子も素こものっこの一幕習てお出トいひて
おし招へこまぐ。狂女い元来性百出の者魚もあるこん入かする
「上」ことで吾俳い乗ぐョ。時ホアノ長吉どんとやっぱおあこと
こく敷うちゃ。何うを妻ーくいってお主ぢ子。大こと袖方お
仕事もお学ぢらう。今方招お云ノ。当時荘左で一変と
このこ。何ときこお師匠さんぢ上「ヲ」そこまこうエ。そりゃアノ彼とこの

おの幕ホ出こ。お民さんとこの人サ「ヲヤ」女で荘左一変
こエ。大ここその良人のこまこ「さまこうサその良人と
ここホア。幸雅信吉とひまて。一変ぢとこまこぐ。そこ
ヤア三年ぢこ跡ホ死で子。吏ここアノお民さんぢ。子子と取
て教へて居まこ「ヲヤ方招こエまこいノウ。ちまぢゃア
全体敷ホの。女児でもあるぢこ「ナニ方招ぢゃア
ありません。彼人の宅ハ弱虫の。羅兵衛でぢいません。
先頃居こ便ホ性こ。おあ乳の毒ぢ帰りぢホ。



巻まくりごけまど弱掛の。吾俳の宅へとの手簡を。何卒
拋り込でお呉ふらて。天保を一枚つみて出しさうら。面
けて外つとるゆが為て。史でうくゝ初りてますト不間清りの
下雅ゞ親。そまこでい彼がお民えと。そへば胸の悔つくと。お
つと掾へて「フヤ〳〵」左招ふエ。を招ふ蕊云ゞ出来しうゝば。
さぞ嬉〳〵うらうれエ。お方こまい吾俳ゞ頂いて。まゞを
をつけあいのゞうとるヨトさ出し鏡をいでのて。ドレ
仕ませうと弦てゆく。お絡いいゆ〳〵安乳〳〵。そまふて

寸ふ遠ふ方〳〵。楽屋へゆまて密ふゆび出。久しぶりゆて
対面〳〵。ゆゞ外のうくの縛りけを。具ふ彩して今ようう。
女あゞうゆカ草。まゝ支親ゞ命日忌日ゆ。安て茶湯や
昊猪ゆ。供へんうのと飯食。思按方〳〵狂云の。ゆゞ
を使てをこを立出。楽屋の口まで往ようゝゞ。まさ何と
方〳〵護身新さふ。二足三足ようち戻ゆ。ゆゞ外のうくの
縛りけを。在のまふ〳〵ようて。史を蕊云とおゆ
気時い。何を云てゆこう方云報。外の切方さふ面方

拭ひ。あらまほしきをいひ立てゝ。をんでゆまるゝ人底と。寡
らまとゝ。觀齋。愛ぬ不倦るとあり。とゝ。銓あきのこう
猪狸の。祝こさゝ。ゆきを果る。今月ふ限りゝとふゆ
あゝ。と。ゆひかゝゝて更あり。ふ。元の席ふ。ち帰る。人
狸の千茅先量。偖へ空さゝあるをあり

毬唄三人娘第二編巻之上 終